

知ってますか
技術の

あれ
これ

26

フランソワ・ゾラと エミール・ゾラ親子(3)

土木技師フランソワ・ゾラとドレフュス事件

三浦 基弘
MIURA Motohiro
元大東文化大学講師



フランソワ・ゾラの晩年、その後のエミール・ゾラ

フランソワ・ゾラ (François Zola 1795-1847 以下父ゾラ) の息子エミール・ゾラ (Émile Zola 1840-1902 以下ゾラ) は、作家である。父ゾラの35歳以降の記録を紹介すると、1830年、父ゾラはオーストリアを出て、短期間オランダ、次いで英国に滞在する。その後フランスに移り、到着するとすぐにイタリア名前のフランチェスコをフランス名前のフランソワに変更し、創設されたばかりの外人部隊に中尉として雇われる。1832年10月アルジェリアに赴任し、その後職を辞して1833年1月24日にマルセイユに上陸した。そこで、公共事業に携わるエンジニアとなる。

1843年、ゾラ一家はエックス・アン・プロヴァンス (以下エックス) に移住。重要かつ大規模な計画を父ゾラは提案したが、採択されたものは一件も無かった。結局実現したのは、彼自身が監督したヨーロッパ初のアーチ式ダムとエックスの町に今も水を供給しているゾラ運河だけであった。父ゾラは52歳で死去。ゾラ7歳の時であった。若い母エミリー・オーベール (1819-1880) の前に残ったのは、夫の負債であった。出資者の選択の誤りと会社の共同経営者たちの「(株価)操作」によって引き起こされた深刻な金銭問題だった。それまでゾラは、何の不自由もなく過ごしてきたが、父ゾラが鬼籍に入ってから、ゾラ家の経済状態は一変したのである。幼いゾラの頭にもすでに家の窮状が明らかになってきたのである。

ゾラが12歳になったころ、今までお金のかかった

ノートル＝ダム小学校を去り、7年制中学ブルボン中学校に移ることになる。ここで始終、いたずらっ子からゾラはいじめにあうことになる。しかし、ゾラをいじめから救った同級生がいた。それは後年、大画家になるポール・セザンヌ (以下セザンヌ) であった。セザンヌのおかげでゾラは立ちなおり、勉学に精を出せるようになった。1853年の夏、ゾラの成績は全科目平均最優秀賞、作文二等賞、解釈一等賞、フランス文法二等賞、歴史および地理一等賞、古典朗読一等賞などであった。研究者によると、どこの中学校にもいる生徒の学業成績で、後年の作家らしい才能の前触れはそこにはないという。

1859年、ゾラが19歳の時に理科の大学入学資格試験を受験。筆記試験には合格するが、口頭試問で二度不合格。試験会場はソルボンヌ大学。一日目は筆記試験。翌日の結果発表によれば、受験者中二番でパス。二日目は口頭試問。物理、化学、博物、算術、代数などゾラは巧みに返答。最後に現代語と文学の試問であった。歴史の試問で、シャルマーニュ (カール) 大帝 (742-814) の没年を聞かれた。ゾラは躊躇した挙句にフランソワ1世 (1494-1547) の治下に死んだと答えた。700年違っていた。文学の試問では、『寓話詩』(ラ・フォンテーヌ) の一篇の説明を求められた。ゾラの浪漫的な解説に試験官は反対だったらしい。最後にドイツ語の試問。ゾラは一語も読むことができなかったという。かくして口頭試問は終了。

試験官の協議の結果、理科関係の試験官はゾラの明晰な回答に関心を示し、及第を主張したが、文学関係